

母親の児童に対する悩み

(第一報告)

昭和女子大学児童教育研究所 戸田幸子

子をもつ親として、子どもに関する多くの問題を持ち、その解決に常に頭を悩ましていることは言うまでもないことである。わたくしは、母親の児童に対する悩みが、如何なるものであるかを分析しようとして調査をおこなった。今回は当研究所非来訪者(母親)がもつ悩みについての一部の報告である。

調査には質問紙を作製し、昭和三五年一月から、三六年二月の間に世田谷区および大田区の一地域の幼稚園および小学校の児童、三才から十二才までの男児六七八名、女児六四九名計一三二七名についておこなった。

調査成績は、抄録一三—一四頁に示したが、結論として次のことが言える。

- 1 約八〇%の母親は園児についても学童についても男女の別なく何らかの悩みをもっている(抄録第一表)
- 2 悩みを分類すると、家庭内の人間関係、家庭外の人間関係、学習関係、食事関係、習癖関係、身体関係および一般社会関係とになる。
- 3 悩みのなかで、園児については、習癖関係がとくに多く、学童については、習癖関係がまたとくに多い外に、学習関係と身体関係がとくに多くなっている(抄録第二表・第一図)
- 4 母親は、子どもの三才に食事関係、五才の家庭外の人間関係・

身体関係、六才の習癖関係・家庭内の人間関係、八才の一般社会関係について悩んでいるようである(抄録第三表)

(大会抄録13—14頁)

「ひきつけ」に関する調査

昭和女子大学児童教育研究所 村松功雄

森脇玲子

当研究所へ、一九五六年六月から一九六〇年六月までの約四カ年の間に、相談ケースとして来所した三七五ケースのうち、その九・九%に当たる三七ケースが、過去に「ひきつけ」をもつ児童であることが判明したので、「ひきつけ」の初発年齢・発作回数・状況および生活史——出生順位・出産状況・言語開始の時期——並びに当研究所来所の理由および来所時に検査した知能指数などについて調査を施し、これに検討を加えた。

なお、本調査には、てんかん性痙攣の類と診断されるものは、あらかじめこれを除外した。

調査の結果次のことが言える。(抄録参照)

- (一) ひきつけの性別による発現率(抄録第一表)は、男児の七三%、女児の二七%となり、男児の発現率が全体の約 $\frac{3}{4}$ をしめている。
- (二) 出生順位(抄録第二表・第一図)では、第一子の発現率は四八・七%、第二子の二四・三%、第三子の一〇・八%となり、第一が約半数をしめていることは注目に値することとおもわれる。
- (三) 出産状況(抄録第三表)よりみると、正常産の七五・七%、異常